

<参会者による授業で良かった点と改善点>

- 良かったという点と、気になった点を1つ以上近くの人と協議。
- 良かった点
 - ①「なるほど」「ありがとう」「おお」などの共感する言葉が出ていた。
 - ②子どもたちから話し合いに対する質問が出ていなくて、自分たちで進められていた。
 - ③思考ツールが子どもたちの思考の流れに合っていた。
 - ④1年生にしては、付箋にたくさんの言葉が書かれていた。
- 気になった点
 - ①前で失敗してしまった子どもに声をかけていくことが失敗から成功につなげていく。
 - ②自分のカードについてどんなことを書いたか忘れていた。

<田村調査官の授業講評>

- 今日の授業は一言で言うと「あまり楽しそうではなかった」「本当に楽しいのか」という気がする。原因はどこにあるのかと考えたら、「コツ」というのは、本当に子どもが見出そうとしているのかということである。「コツ」というキーワードは、子どもから生み出されたものではなく、教師から出されてものである。
- 「コツ」がうまくいけば、幼稚園生との遊びが楽しくなるという仕組みになっているのだが、本人たちにとって、そうなっているのか。
- 単元として、本当に子どもが楽しめるような活動になっていないのではないかという印象を受ける。
- 個別には、一生懸命な様子が見えているものの、そうでない子どももいた。1年生が幼稚園生とは年代が近い。そうしたときに、一緒に遊ぶという感じであり、コツをきちんと把握して、それをしっかり身に付けてきちんと伝えられれば楽しんでもらえるという状況になれるのかどうか。いけそうな子どもとそうでない子がいる。まだ、存分に自分の遊びが楽しめていないという状況もあった。

<子どもの思考が教師の流れに合っているか>

- 1年2組で「コツ」という言葉が出てくるのは、黒板の右上に黄色で先生が書くわけである。残念ながら子どもから「コツ」という言葉が出てこない。教師が「コツ」って言ってしまふ。どういうふうにして、「コツ」という言葉が出てくるかということがすごく大事だと考えている。
- 子どもたちが本当にそういうことを求め、そこに向かおうとしているのか。その「コツ」が本当に身に付けば、次の遊びが楽しくなるという1年4組の授業につながる。
- 1年4組では、フレーム、思考ツールが用意されている。思考ツールを否定するつもりはないが、低学年で使うときは、発達に合っているのかよく考える方がよい。
- 1年2組は出だして躓く。子どもたちが動けなくなってしまった。授業が始まってすぐ子どもたちは、立ち上がって外に出ようとした。自分でコツを確かめたいのであって、カードで整理なんてしたいと思っていない。コツを自分でやってみて試してみて、本当にいいかどうか知りたいが、教師はカードで処理しなさいと指示する。子どもは何をしていいかわからないので、「話し合いから始めます」と、教師が再度説明をする。
- 子どもの思考は試すことにいっているのに、教師がぐっと引っ張り戻してこれしなさいと言っているように見える。実際に話し合いが始まると、「試そう早く早く」とやってみたくてしょうがないという感じであった。試すときもカードをしっかりと読める子どもとそうでない子どもとの差が大きい状況が見られた。

<カードを思考ツールとして処理させることと板書の工夫>

- こうした状況を見ると、カード(付箋)を処理するということが、多くの子どもたちにとって、適切

であったのかどうか考えなければならない。

- チャレンジとして、カード（付箋）を使って、言語化されたものを処理していく方法は悪くはないが、本当に子どもたちの発達に合っているのかと考える。
- 1年2組の黒板についても、「にこにこ」と「こまった」の2つに分けているのであるが、何かもっと工夫できないかと考えた。
- 簡単に言えば、この場面で幼稚園の子どもたちがどんなふうに使っていたのかをみんなでどんどん思いを広げたいわけである。思いを広げたいのだが、今日の授業の場面だとどうなっているかという、カード（付箋）に書いてきたことを一生懸命たどって読み上げている。しかも自分の言葉ではないので、うまく読めなかつたりする。
- 仮にそこで、カード（付箋）を聞いたときに、「あ、そういえば、ああいうこともあったよね。」とか「あのとき、あの子ってこんなふうに使っていたから、これもそうかもしれない」のように、使っていたことが数珠状にいっぱい引き出されてくれば、こういうことをしている場面はとっても価値があると思う。しかし、今日は書いてあることをただ言っているだけという感じがした。
- カード（付箋）に書いてあることだけではなく、そのほかにもこんな思いやこんな気持ちになったかもしれないということがたくさん出てくる板書の工夫はないか考えてもらいたい。
- 授業研究で大事なことは、授業者の授業力をチェックする場ではないということ。参観者の力量が問われる。参観者が授業を見ていて、私はこういう場面は学び、この場面は気になったというときに、この気になった後が問題である。代案が出せるかどうかである。私ならこんなこともできたらいいのではないかと言えるかどうかはすごく重要なポイントである。ここが言えるようになってくると、授業を見た後の我々の力量形成につながっていくということである。このような授業研究をしないとただのコメンテーターの集まりみたいな感じになってしまう。
- 工夫（参会者の代案）
 - ①1年生は忘れやすいので、前の時間に書いたことを付箋だけでなく、ビデオで見せる。
 - ②幼稚園の子どもになりきって考えさせる。
 - ③幼稚園生が見えるようなイメージできる板書にする。
 - ④幼稚園生がどんなふうに使っていたかを紹介する。
- 先生が「出てきたカードを2つに分けて処理させたい」と願った。処理するということは考えるということだから、そこに結び付くのだが、処理させたい教師がいて、処理させる方法が決まっていた、処理させたゴールも決まっているときに、指示が出始める。指示が出始めると子どもは受身にならざるを得ない状況になる。

＜イメージをふくらませることの重要性＞

- 低学年はイメージをふくらませることがすごく大事である。吹き出しにするかカードにするかはちょっと違うのではないかと思う。低学年は吹き出しに書くことによって、イメージがふくらむのではないか。イメージがふくらめば、書かれていないこともどんどん出てくるのではないか。
- 先に枠を決めて放り込ませようとするのと、いろんな気付いたことを出し合ってきたらこうなのではないかとなっていくのとは違うということである。
- 本日のすすめ方は、機械的で分析的な感じである。手順が複雑で、子どもの自然な流れではない。コツを練習してやりたいと思っているのに、カードを真ん中において左と右に3つに分けるということになっている。
- 比較的低学年の子どもたちにとって、分析的なことは得意ではない。発達においてそうだとしたことである。低学年の子どもたちで考えた方がよいことは、イメージである。イメージをいかに豊かにふくらませるかである。彼らがイメージを豊かにふくらませれば、イメージの方向に動いていく。子どもでなくても人間の行動は結構イメージの方向に向かっていく。
- 低学年の子どもたちが、頭の中にイメージがふくらんできて、「もっとこんなおもちゃにしたい」と思えば作りかえ、「もっといろんな人に会ってみたい」と思えば会いに行くわけである。
- このようなことが、皆さんの授業の中で工夫されていくといいのではないかと思う。ビジュアル化さ

れた思考ツール等の板書の工夫もされるといいし、最後のおしゃべりカードについても同じことが言える。おしゃべりカードという名前はかわいいが、出来上がりは先生ぽい。本当におしゃべりしたいと思えるものになっていないのではないか。

- どこに行きつくかという、子どもの目線に立てるかどうかの一点だと思う。教師がいろんなところに行きたい気持ちはわかるが、そこを抑えながら、より高い指導性を発揮し、子どもの目線でいかに学習活動や単元を構成していくかということではないかと思う。
- 最後の場面でおしゃべりカードにぐんぐん書いているかどうかを見たときに、勢いよく書こうとしている子どもたちとそうでない子どもの差が出てきている。授業の中で、みんながイメージをもてて、充実した活動が展開されれば、もっともっと書けると思う。

＜学習指導要領の改訂に向けて＞

- 1月20日に中教審が諮問されて、次の学習指導要領の改訂に向けての議論が始まる。
- 次の改訂の大きな方向性は、「課題の発見・解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ子どもの育成」ということである。今日のような授業でよい。その授業の質を高めていこうということである。
- 中学校や高等学校がこれから議論の中心となる。高校改革が大きな話題の中心となる。総合的な学習の時間についても非常に関係が出てくる。
- 幼小連携についても重要視されている。大分県は全国の中で、幼小連携の先進地であるので、一層すすめてほしい。

＜幼児期の教育で大切なこと＞

- 幼稚園や保育所の先生は環境を構成していく。幼児は体験や関わりを通して学んでいく。これが大前提である。体験が重要であるということである。体験の重要性がまさに低学年の生活科においても展開されなければならない。
- 生活科ができて25年である。平成元年の学習指導要領で新設され、平成4年から全面実施。すでに生活科を学んで、教師となっている人も出てきている。
- 生活科は、体験を通して自立への基礎を養う。体験をいかに大切にしていけるかということを考えていきたい。
- 私たち人間が認知能力や身体能力を高めていくには、視覚、聴覚、嗅覚、味覚がないと期待するような能力が育たないといわれている。さらにこうした感覚の基礎となるものがある。それが何かというと、位置感覚とか手足の触覚、動きの感覚というものと言われている。
- 体を動かして身体を通して学ぶということはすごく大事である。体を動かす瞬間に子どもたちは将来に渡る認知能力や身体能力の基礎を養っているのである。
- 我々が物事を認識するときに、活動を通して学ぶタイプと、音で学ぶタイプと、映像で学ぶタイプとがある。どうも物事を学ぶときに、我々は音声言語や文字言語で学ぶと思いがちである。だから、教師はたくさんしゃべっておいて「分かりましたか」と聞く。子どもたちは分かっているにもかかわらず、「分かりました」と言うようになる。低学年は活動を通して学ぶタイプが多いのである。
- 内田教授によると、難関大学を突破した子どもたちの幼児期の教育には、「思いっきり遊んだ」「意欲を大切にしてもらっていた」「集中していた」という特徴がある。幼児期から早期教育で漢字ひらがな英語などを行うよりも、発達に応じたこうした体験を存分にされた方が、将来に渡って力を発揮することが見えてきた。読み聞かせも特徴があり、難関突破者は「共感型」であり、難関突破していない方は「強制型」であった。

＜体験活動の重要性＞

- 低学年、幼児期に活動をすることが重要であるし、しかも子どもたちが自分の思いや願いを存分に発揮しながら体験を通して学ぶことが重要だということである。
- 実際に生き物に触れる子どもたちの目というものはとても大事である。秋の研究会を開催した上越の小学校でヤギを飼う実践があった。こうした活動が体験とともに学ばれていく。このことが、きわめ

て学力にも結び付くことが分かってきている。

- 学力は記憶の問題と言える。覚えているかどうかということである。短期記憶と長期記憶があるが、どちらかと言えば、長期記憶として残ってほしいわけである。長期記憶の中には3種類がある。特に3種類の中でも、特に長く残るのは、エピソード記憶である。つまり、情報が入った時の自分の状況、場面、関係などが記憶に影響するということである。
- ずっと覚えていることは、印象的な出来事があったことが多い。そう考えると教室で一方的に話された言葉よりも、活動して楽しかったり自分にとって本気になったりしているときの方が残ることは容易に想像できる。だから体験は重要だということである。
- 最近明確になってきたのは、体験のときの感覚記憶は優れており、たくさん情報が入ってくるのだが、失われやすいという弱みがある。そこで、感覚記憶を一旦作業記憶としてワーキングメモリーを通すとよいといわれている。入ってきた情報を、一回作業を通すということである。作業を通すとハードディスクに保存されるということである。
- 体験でいろいろ情報が入るが、そのままでは失われるので、作業をする場面が入ってくるとしっかり残る。この作業が、体験の後の表現ということである。
- 今日の授業で、子どもが一生懸命話をしたり、書いたりすることは悪くない。悪くはないが、その書いたり話したりすることが、子どもの意識の流れにうまくのっているかどうかが重要である。
- 意味のある学習と意味のない学習があり、意味のある学習の方が記憶に残る。意味のない学習は、やらされている学習なので残りにくいといことがはっきりしてきた。
- 子どもたちは、話を聞いているように見えても、実は面白くないと思うと、人間の前頭葉は情報をシャットアウトするということがわかってきた。いかに子どもにとって意味のある学習であるかどうかということが重要である。

＜表現として言語化することの重要性＞

- 体験をしたことを言語化することにより、自らの学びを自覚化することができる。また、クラスの中で共有できる。
- 低学年というのは、よく聞こえる。聞こえるから書く。書いたら位置付ける。位置付けられたら他の子どもの書いたものを見なくなる。話し合いが始まるということである。子どもの意識に沿った形で学習が展開されていくということである。
- 子どもが対象と一体化するのは、レベルが低いことではない。それは低学年の子どもたちの特徴であり、良さである。こうした活動をすることが重要である。
- このように考えると、低学年の発達をいつも考えながら、体験の質が高まるようにしていくことが重要で、難易度が高い。このことが上手なのは幼稚園や保育所の先生である。このような卓越した技を真似していくことが必要である。小学校の教師は、口で子どもを動かすことができる。幼稚園の子どもはそれではだめなので、工夫されるし、環境を整えるわけである。
- 体験の質を高めるための表現が重要である。体験したことを伝え合う。伝え合ったらまた体験してみたいくなる。潤沢に体験をしていく生活科と国語科などの表現することなどをリンクさせることは親和性が高く、生活科と国語科を相性がいい。総合と国語科も相性がとてもよいので、関連を考えていくのはとてもよいことである。
- 気を付けたいのは、体験よりも表現がやらせっぽくなるので、朝顔の声を聞く実践や図鑑づくりのように展開していけるようにしていくとよい。子どもの思いや願いの実現が自分たちでぐっといけるようにすると子どもたちが本気になっていく。子どもたちの意欲をどう高めていくか。

＜体験したことを言葉にすると気付きが生まれ、気付きが次の行為を生む＞

- 体験したことを言葉にすると気付きが生まれる。この気付きというものが次の行動に結び付いていく。気付きが生まれると行為が始まる。おもちゃ作りをしているときに、どんぐりゴマを作っているときに、どんぐりの軸をどこにさすとうまく回るか気付いたから、そうする。回すときにこんな風にさすとよく回ると気付いたからいっぱいやる。気付くと行動が生まれる。

- 気付きが次の行動につながるかと言えば、気付いた時に充実感や達成感、一体感が得られるので、また行動したくなる。気付きは大切で、気付きの質が高まることは重要であるが、気付きの質が高まることをゴールとするのではなく、そのことによって次のアクションが起きる。
- これが次の学習に向かっていく力となることが一番大切である。低学年のときに生活科でこういう力が育っていると上の学年にいてもいい。一生懸命やるとうまくいくと思えるということである。やらされるのではなく、主体的である。これが次の活動に結び付く。
- こうしたよい傾向が何度も繰り返されると、好ましい心的傾向性が安定的に形成される。気を付けなくてはならないのは、何度チャレンジしてもうまくいかないことが繰り返されると、好ましくない心的傾向性が安定的に形成されてしまう。子どもたちの意欲や態度は、実は生まれもっているというよりもむしろ教育活動によって形成されるということである。
- 生活科は、こうした好ましい心的傾向性が形成されやすい。エピソード記憶というのは、子どもたちが興味関心をもっているときに、形成されることが分かった。おもしろいな不思議だなと本気になってやっているときにエピソード記憶になることが分かった。こうした状態を作り出すことが大切である。

＜体験と思考を交互に、より協同的に進める授業者の意識＞

- 思考を豊かにするには体験が必要で、さらに自分だけでは気付かなかったことも協同的に行うことでより高めあうことができる。
- 教師は「どうだった」「どうする」「どう」という言葉を使いながら、子どもを語らせていくことが大切である。
- また、「なるほど」「うん、そうなの」「へえ、すごいね」と言いながら、黒板に位置付けていく。すると、子どもたちが語り始める。
- 授業の設計をしっかりとっておき、しかも子どもの目線に下りながら低学年の子どもの発想にうまく合わせながら授業を行っていく。
- 一番気付いてほしいことを教師が言わず、何とか子どもの口から出させるようにすることが、生活科における概念構成のイメージである。我々が物事を概念化し確かにしていくには、生活的概念と科学的概念があり、生活的概念とは体験を通してできていくものである。しかし体験だけではなく、科学的概念と言われる定義や言葉が重要になっていく。この両者が行ったり来たりすることがより確かになっていく。
- この次のステップは、書いてあることから離れて語れる子どもたちになるような教師と子どもとの関連が図れるとよい。活動が豊かになれば、子どもはしゃべるようになる。担任の立ち居振る舞いも非常に重要である。
- 話型が話題になることがあるが、あまり話型にこだわると、話せなくなってしまうこともある。また、「よいですか」「よいです」「分かりましたか」「分かりました」も形骸化して思考停止する可能性がある。一問一答の授業であると、子どもの発話も単語になってしまう傾向がある。
- クリティカルでクリエイティブな発話をさせたい。授業中の子どもの語りにその傾向がみられる。クリティカルは自分の意見と比べることで、クリエイティブは自分の意見に加えている。「なるほど」という口癖の教師のクラスは、子どもたちはどんどん話せるようになっていく。
- 子どもの会話を促進するときの、教師の上手な関わり方の言葉としてマジックワードの3つは、「いいね」「すごいね」「なるほどね」である。
- 子どもは、未熟な学習者であるという意識を有能な学習者であるという意識に変えていく必要がある。
- 全国学力・学習状況調査と総合的な学習の時間との関係を見たときに、B問題においてその差が顕著となっている。
- 自分から学んで思いや願いを実現する生活科や問題を探究的・協同的に解決していく総合的な学習の時間を丁寧に行うことが、期待する学力に結び付くという大きな流れが出来つつある。今回生活科と国語科との関連を明確にさせていただいた鶴岡小学校の今回の研究にお礼を申し上げる。(了)

(文責：佐伯教育事務所)